

天文学とプラネタリウム



第118回



今月のお題

ドーム空間で楽しむ全球写真



全球写真は中に入って見るのが一番。アルマ望遠鏡サイトで撮影した全球写真をドームに投影してみました。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

1月号のコラムで取り上げた「その場のすべてを記録する」全球カメラ RICOH THETA。昨年11月から12月にかけてのチリ・アルマ望遠鏡出張にお供してもらい、砂漠の中の一歩道や標高5000メートルの高地に並んだアンテナ群の中心、さらに望遠鏡コントロールルームなど、さまざまところで写真を撮影してきたところまでご紹介しました。シャッター一発で全球撮れるので、基本的には撮影者も写る臨場感が強みですが、携帯端末からWiFi経由でシャッターが切れるので物陰に隠れて風景だけ撮るといった使い方もできます。でもやはり、撮影者が映り込んでいた方が面白い絵になるようです。

アルマ望遠鏡サイトで撮影してきた写真は、Microsoft PhotosynthのNAOJ_ALMAアカウントで公開しています。ブラウザ上でぐりぐりと写真を動かして「周囲を見渡す」感覚は、全球写真ならではのものです。アンテナの林の中、アンテナ移動専用台車の中、広い砂漠の中など、日本の日常生活では体験できない空間ばかりです。ぜひ一度ご覧ください(ああ、いつになくアルマ望遠鏡広報モード)。

さてそんな「非日常空間」ですが、コンピュータの四角い画面上で見ただけではなかなか「体験」というレベルにまでは到達できません。全球映像は、なんといってもその中に入って楽しむのが一番。ちょうど東京・北の丸公園の科学技術館シンラドームにこの写真を投影する機会をいただきましたので、さっそく行ってきました。

シンラドームでは毎週土曜日に科学者が案内役を務める科学ライブショー『ユニバース』が開催されています。今回は私をゲストとしての参加。アルマ望遠鏡現地レポートとして全球写真をお見せしました。全球写真自体はそれほど高い解像度ではないので、広いドームに映して大丈夫かが気がかりでしたが、雰囲気を感じるには申し分ないクオリティでした。さらに最近の投影システムは、メルカトル図法的に展開された四角い全球写真をぱぱっとフルドーム画像に変換してくれてとても便利。密に並んだアンテナ群の中心、低い位置から撮影した画像では、そそり立つアンテナが大迫力で迫ってきます。右を見ても左を見ても正面を見てもアンテナ、そして真上には紺碧の空。まさにドームだから



シンラドームでの一コマ。口をあぐりあげて見上げる子供もいました。

こそ味わえる臨場感がありました。あと足りないのは強い日差しと強い風、そして乾燥と酸欠な雰囲気でしょうか。写真をご覧になったお客さんの反応も上々でした。現地はまだ観光客の受け入れを行っていないので、この光景に包まれるというのはなかなかできない体験です。デジタル投影システムが入っているプラネタリウムでは、シンラドームのように比較的手軽に全球写真をドームに投影できるところもあるようです。今後は素材として画像をお配りして、いろんなところで使っていただくのもよいかもかもしれません。